

平成 29 年度 (第 65 回) 中国・四国地区大学教育研究会基調講演

文系の知とは何か? —長く広い歴史のなかで未来を見通す—

吉見 俊哉 (東京大学大学院情報学環教授)

本日はお招きいただきありがとうございます。「文系の知とは何か?—長く広い歴史の中で未来を見通す—」というテーマでこれから 1 時間程お話をさせていただきます。

今ご紹介がございましたけど、私はこれまでこのテーマに関連して本を 3 冊出しております。一つは『大学とは何か』。これは岩波新書で 6 年前に出しました。それから昨年、集英社新書で『「文系学部廃止」の衝撃』というのを出版させていただきました。それからつい先ごろ、とんでもないタイトルなのですが、『大予言—「歴史の尺度」が示す未来』というのを集英社新書で出版させていただきました。いわば『大学とは何か』が大学について考える原理編。それから『「文系学部廃止」の衝撃』が現状分析編。そしてそこで唱えたことを自分で実際にやってみたのが、『大予言』の実践編、という流れで整理できます。3 冊今日ここに持ってきておりますので、お返しいただけますと誠に幸いです。会場のほうでパラパラ見て、いずれも 800 円程度でお手軽でございますので、ぜひお買い求めいただけると嬉しい限りです。お買い得だと自負しております。よろしく願いいたします。

それでは本題に入りたいと思います。5 つの話をこれからしてまいります。一昨年、文科省が国立大学の文系学部を潰すと言っているという話の流れ、大騒ぎになりました。この「文系学部廃止」報道の虚実は何であったのか。これについてまず導入的にお話をします。それから釈迦に説法ではございますけど、大学は今全体としてどういう状況に置かれているのかという大学の現在、これを 2 番目に話させていただきます。そして非常に長いスパンになりますけど、700 年、800 年という長い数世紀を及ぶ広がりの中で、大学の死と再生という話を 3 番目に致します。そして 4 番目に文系、人文社会科学系とは一体何なのかという話をさせていただきます。そこでの結論は、「文系」は長く役に立つということです。文系は役に立たないけれども大切という主張は間違っています。文系は役に立たないけれども大切なんだと言ってしまったら、もう文系は終わりだと思います。そうではなく、文系は絶対役に立つと言い切ることが、これからの人文社会科学にとっては重要なことだと私は申し上げたいのです。それから 5 番目に「甲殻類」から「脊椎動物」へ。実際には甲殻類は脊椎動物には進化しませんけれど、大学は甲殻類から脊椎動物に進化しなくては行けない、というのが私の主張でございます。この 5 点をそれぞれ 10 分強ぐらいでお話していきたいと思います。

まず 1 番目、「文系学部廃止」報道の虚実ですが、皆さんよくご承知のように、2015 年、

約2年前、新聞各紙はですね、「国立26大学、文系改廃へ。国立大、文系見直しを」というような報道を流し、大騒ぎになりました。これは一体何だったのかということ、これからお話してまいります。

事実を振り返ってみましょう。最初に報道を出したのは産経新聞です。5月28日、理系に重点を置いた政府の成長戦略に沿った学部の再編で、教員養成系や人文系の学部、大学院は規模縮小に転換するという報道が出ました。6月8日、文科省の通知が出た当日になると、日経、朝日が似たような報道を出します。教員養成系などについて、社会に求められる人材を育てていなければ、廃止や分野の転換を求めたという報道です。6月19日、これは毎日新聞ですけど、国立大学の文系に消滅の危機が迫っている、産業界の圧力で国立大学の文系は無くなるかもしれない、という報道が出てまいります。

こうした報道が日を迫うごとにエスカレートしていきます。東京新聞は6月25日に「人文社会系『改廃』強要、大学の権力批判、封じ込めが目的か」、教員側からは現代の焚書坑儒だというふうな批判が出ているということ、強圧的に文科省によって国立大学の人文社会系は潰されようとしているという報道が出てまいります。このように新聞は文科省の動きを一斉に批判します。7月29日、大学を衰弱させる文系廃止の通知はけしからんという批判が日経新聞の社説でも出ます。この時点になりますと、文科省の通知は、文系廃止通知だというふうに簡略化されて理解されていきます。さらに8月23日になりますと、読売新聞の報道ですけど、既に文系学部のある全国60校のうち半数近い26校が、2016年以降、文系学部の改廃を計画しているという報道が出る。もうすでに無くなることになっちゃったみたいな報道になるわけです。そしてそのような動きを受けて、日本学術会議も反対声明を急遽出します。9月9日になると、経団連までが我々はそんなことは言っていない。文系が無くなっていいなんて思っていないという反対声明を出すわけです。

文科省は、そこらじゅうから批判を受けて袋叩きに遭ったような形になります。一体何が起こっていたのでしょうか。事実は、世の中の多くの人を受け止めていた状況とはかなり違います。まず、文科省は何を通知していたのかということを確認します。よくご存知の方もいると思いますけど、もう一回振り返っておきたいと思います。

問題になった通知は6月8日の「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」、いわゆる「ミッションの再定義」を踏まえた組織の見直しです。これ、実は昔から出ているんですけど、それが問題になりました。その中で「特に教員養成系学部・大学院、人文社会系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組む」という文言があります。この主語の部分と述語の部分、真ん中全部すっ飛ばして、新聞は使ったわけですね。「教員養成系学部・大学院、人文社会系学部・大学院については、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組まねばならない」という文言として新聞は一斉に報道していきました。一次資料を見ていくと、ちょっと調べただけでもこのぐらいのことはすぐわかります。

そして、実は全く同じ内容の文書が1年前、つまり2014年の8月にも文科省から出されていたのです。その中で文科省は全国の国立大学に対してどういうことを言っていたかというと、「『ミッションの再定義』を踏まえ)、特に教員養成系学部・大学院、人文社会系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきではないか」。全く同じですね。同じ方向が1年前にもはっきり示されていたのです。しかし、2014年の8月にこれが文科省から出たときには、世の中の反応は全くありませんでした。東京新聞が若干批判していましたが、他のメディアは全然反応していません。問題にもならなかったのです。ですから1年後、文科省はごく当然のように同じ内容を通知として出していったのです。そうしたら、今度は大騒ぎになり、文科省は袋叩きに遭ったわけです。文科省からすれば、1年前に叩かれるならばまだ理解できますが、2015年にこんな目に遭うとは思っていなかったでしょう。

何が違うのか。メッセージは全く同じなのです。2014年と2015年で、本当に同じです。しかし受容する側のコンテキストが全然違ったのです。2015年の夏の政治状況を思い起こしてみれば明らかです。当時安保関連法案の強行採決で、国会前にはSEALDsだとか大量のデモ隊が取り囲んで大騒ぎになっていました。安倍政権は非常に強引なことをする政権であるということで、マスコミも世論も問題視するようになっていた。さらに新国立競技場の問題で、どうも文科省のやっていることは問題があるんじゃないかという声が高まっていました。加えて、当時の下村文科大臣は、日の丸・君が代が国立大学で歌われるべきであるということも発言しております。

こういう雰囲気の中でマスコミは何か文科省を叩くネタがないかということを生懸命探していた。そこに、ポッと1年前と同じ通知が出たわけです。これぞ叩きどころということで、マスコミは一斉にこれをかなり膨らませて大騒ぎにしていってというのが事実の経過でした。そうすると、もちろん通知自体の問題があるのですが、2015年というコンテキストの中であの大騒ぎを起こしていった最大の要因は、文科省よりもマスコミだったと結論できます。当時、この問題をもうちょっと長いスパンの中で一体何が問われているのかを考察し、論じた新聞やテレビがあったでしょうか。大手メディアでは、ほとんど全くなかったと思います。私は、2015年の報道に関してはマスコミの問題、つまり彼らの大学に対する認識のレベルの低さにすごく問題があったと考えています。

では、何が論じられるべきだったのか。この問題、つまり人文社会系や文系の問題、教養教育の問題は、既に国立大学の法人化に向かう頃から、つまり2000年代初頭から出ていた問題で、10数年間ずっと起こってきた変化の一部です。既に2001年6月に文科省は「国立大学の構造改革の方針」で、教員養成系などの規模縮小・再編、単科大と他大学との統合、県域を越えた大学・学部間の再編・統合、国立大学の数の大幅な削減、という方針を出しております。ですから、2001年の段階で出ている方針が継続しているわけで、2015年になって突然文科省がおかしなこと言い始めたという理解は全く間違っています。

そして、我々が検証すべきなのは、国立大学の法人化から起こってきた変化、10数年の変化の中で何が生じてきたのかということです。それは大学改革の方向として正しいのかどうかの検証です。既に多くのレポートが出ています。例えば、2010年7月に出た「国立大学法人化後の現状と課題について」だと、法人化後、国立大学における常勤教員の人件費が減少し、非常勤教員の人件費が急増している。また、人文学分野の教員数は私立大学ではこの10年間ほどで約8%増えているけど、国立大学では11%強減っている。つまり、文系の重点が国立大学から私立大学にシフトしている。そして、共同研究や競争的資金の獲得額は現在、特に国立大学では大幅に増え、外部資金を稼ぐようになってきている。それと見事に反比例するように、研究時間、学術論文の数は大幅に減って、基礎研究力は大幅に劣化していると。金を稼ぐのにみんな一生懸命になっていますから、申請書を書いたり報告書を書いたり予算管理をしたり、そういうことでもう疲れちゃって、大学教師にはもう研究なんかしてる時間ないよ、というのが最近の本音の状況でございます。

こういう問題点というのは、日本の学术界は早くから察知していました。ですから学術会議は2001年の4月26日に、法人化に向かっていく変化の流れの中で、国の政策として人文社会科学系の扱い方に問題があるんじゃないか、という声明を出しています。いまだにこの声明は有効だし、皆さんももっと注目すべきだと思います。「21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性」という声明です。当時、科学技術基本法ができて、総合科学技術会議が編成されていく過程ですね。1950年代以来、日本の原子力政策に莫大な予算が投下されてきたんですが、80年代から90年代にかけて、なかなか難しい問題に直面していく。それは3.11の福島原発の問題まで行くわけですけど、その中で科学技術政策が少しシフトしていく。シフトして、総合科学技術会議ができていく中で、人文社会系はその中に入らない、入れてもらえないで自然科学系だけがリードしていく。これはおかしいということを学術会議は批判をしているわけです。これ、僕は正しいと思いますね。

当時学術会議は何を言っていたかということ、「(人文・社会科学は)自然科学とは異なる発想と手法によって、科学技術に対して独自の貢献を行う可能性をもっている」、「人文・社会科学は人間とその社会を研究対象とするから、人々の動機や価値選択を考察しなければならない。したがって、持続可能な社会ないし循環型社会の構築にしても、クローン人間・遺伝子操作食品・出生前診断・遺伝子個人情報などの問題を扱う生命科学にしても、情報技術のもたらす光と陰にしても、紛争の予防にしても、これらの諸課題の解決のための総合的なプログラムを設計するにあたっては人文・社会科学の役割が重視される」、「科学技術文明の現状を克服するために、文・理の二分法を乗り越えた新しい統合的・融合的知識が必要であり、……自然科学及び人文・社会科学の均衡のとれた発展が必要である」。つまり科学技術を束ねる「かなめ」として人文・社会科学があるということを2001年の時点で学術会議は言っているんです。私もまったくその通りだと思っています。

ですから、この2001年の生命は卓見なのですね。もう17年、20年近く前ですよ。20年近く前にここまで言っているのに、そのあとの17年は何だったのでしょうか。私たち

の国は、この学術会議の声明をちゃんと政策の中に取り入れてきませんでした。いまだにそういう意味では、その後の人文社会科学系や文系の困難というのは、この時点での政策転換がきちんと成されなかったということに起因していると、私は思います。

以上、話を少し整理しておきますと、「文系学部廃止」論を増殖させたのは、日本のマスコミのリテラシーの不足、マスコミの記者たちの勉強不足の面が大いにあった。もっとメディアの皆さんは、深く長く勉強をしてほしいですね。そこに結構、責任があったと思います。それから、「教員養成系、人文社会系の廃止を視野に入れた組織の転換」は、「ミッションの再定義」の流れの中で1年前から既に示されている。また、法人化後の資金力、イノベーション力、グローバル対応重視の大学改革で、多くの変化が理系中心に展開され、文系は取り残されている現状が続いています。これに対してやはり異を唱えなければいけない。だけども異を唱えるのは、文系も大切だからとか、役に立たなくても大切だとかそういう論理ではだめだと思います。そして、一般社会には「理系は役に立ち、文系は役に立たない」という通念が蔓延している。これが問題の根幹です。

私がこういって、いや、先生それは違うでしょ、とおっしゃる方がよくいます。文系は大切です。皆さん、知識人であればあるほど、そうおっしゃいます。でも、お聞きしますが、皆さんの息子さん、娘さんが大学に入るとなると、「お父さん、お母さん、私は医学部に入りました」と言った。うちの息子、娘よくやったって思う方が多いでしょうね。「お父さん、お母さん、文学部に行って哲学やります。歴史やります。文学大好きだから文学やります」つて言うと、ここにいらっしゃる何人かの先生は、なかなかいいじゃないかと思うかもしれませんが、世の中の大半の親御さんたちはそうは思わない。むしろ心配になる人も多いと私は思います。つまり、「理系は役に立ち、文系は役に立たない」という通念はやはり日本社会に蔓延していることを認めざるを得ない。そして、そのことの問題性はいろいろ言われていても、誰も未来の「文系」の可能性について具体的方向を示せていないというのが現状で、これをなんとか変えるべきだというのが私の意見です。

次は大学の現在について。1990年代以降、日本の大学はいくつかの大きな嵐を経験してきました。一つは上からの制度改革です。この制度改革は三つあって、一つは大綱化です。教養部の解体。それから大学院の重点化。これで大学院のレベルがかなり落ちました。大学院生の定員が増えちゃって、定員充足のために、本来だったら大学院に入れちゃいけないレベルの学生まで入れているのが現状だと思います。当然ながらレベルが下がります。それから「国立大学の企業化」。これは、何を言いたいかということ、法人化によって大学内部での分野間の格差が広がったということです。お金をたくさん取ってこられる、工学系なり医学系の一部の研究室は非常に潤っていますが、なかなか外部資金を取ってこられない人文社会系の一部の研究室は非常に貧困化しています。

加えて、注意しておくべきことは、90年代以降、18歳人口がどんどん減っている中で大学数を増やし続けたということです。1945年の時点で、日本には48校しか大学がなかったんです。その後増え続けて、1980年の時点で446校です。この辺まではいいと思いま

す。500校ぐらいまでは日本に大学はあるべきだと思います。ところが1990年代以降、18歳人口はどんどん減って、その後もどんどん減り続けることがわかってるのに、大学の数は増え続けて、ついに800校近くまで達しました。1945年に48校しかなかった大学が、2010年代には800校。20倍近い数です。当然ながら、質の低下が生じます。定員を埋めなきゃなりませんから、だんだんハードルがゆるまって、大学でやっていくだけの基礎力が本当にあるかどうかわからない子まで、大学に入って行く。大学の先生たちはその子たちの底上げをするのに、本当に一生懸命努力せざるを得なくなっていく。

でも、このような大学数の劇的拡大は日本だけで起きているわけではありません。世界的な現象です。アメリカに大学がいくつあるか。正確な数ではないと思いますが、私が把握している限りでは2600～2700あると思います。中国に大学がいくつあるか。これもよくわかりませんが1500～1600はあると思います。こういうふうの世界中を数えていけば、だいたい1万近い大学がある。それぞれの大学に平均数千人の学生がいます。つまり世界中には数千万人の大学生、大学院生がいるのです。それがどんどん世の中に出ていくわけですから、もし彼らにちゃんと就職口が見つかるのなら、世界は超高学歴社会になりますね。でも当然ながら大学は出ても、なかなか就職口が見つからない。そんなに雇用はありません。そうすると大学の質の低下が全世界的に起こり、多くの問題が発生します。

日本の場合、どういうことが生じてきたか。私は、学部名称のカンブリア紀的大爆発と呼んでいますけど、大学の学部の名称が劇的に増えました。1975年には日本中の国立大学私立大学合わせて、学部の名前数は69種しかありません。これは1990年頃までそんなに変わっていません。1990年になって国際文化学部とか環境情報学部とか、いろいろできますけど、学部の名前数は97種類です。このぐらいまでは理解できるのです。100いくつかが学部の名前あったほうがいいと思います。

ところがその後何が起こったかという、1995年に145種。2000年に235種。2005年に360種。2010年に435種。2015年に464種。というふうに、学部の名前が増え続けるんです。中にはシティライフ学部とか、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部等、いろいろあるわけです。こうなると、学部名は一種の化粧です。ほとんどがあるディシプリンを示すというよりは、広告コピーみたいになってくるわけです。お客さんを集めるための広告コピー。これでいいのかということですね。だいたい、高齢化、グローバル化、地域、情報化、マネージメントというテーマの周りに、カッコいい名前をくっつけて学部名称にする。そんなことを繰り返していけば、実学的応用性はどんどん強調されますけど、大学に行くこと自体の価値が劣化します。言い方が悪いですけど、延命のために次々にお化粧を変えていく。化粧直しをしていくんです、大学がどんどん厚化粧になっていく。しかし、中身はどんなの、化粧を取ったらどうなるの、という問題がでてくる。しかもICT技術が発達していますから、若い人たちはスマホでアクセスすればほとんどの情報が得られる。大学に行く意味はそもそも何なのという問いが出てきてしまうわけです。

文科省も国大協も学術会議も中央教育審議会も、これじゃまずいと当然認識していきま

す。ですからここ 10 年ぐらいは様々な改革プランが次々に出てきている。ここに出ているようないろんな内容を、大学は遂行しなければならなくなった。それぞれ言われていることは正しいのです。しかし、問題は、これだけ改革プランが出てくると、現場では何が起こるかということですね。

1990 年代初めくらいまでは、大学の先生はいい商売だったと思いますよ。自分の好きな研究をやって時々論文や本を書いたりして、そこそこレベルの高い学生たちを相手に自分の研究についてお話をしていれば一生食えた。そんな時代がかつてはあった。けれども 90 年代以降の改革の中で、「もっと教育ちゃんとやってください」「授業やってください」「指導もちゃんとやってください」「審査をちゃんとやってください」となった。さらに毎年の研究業績の評価をちゃんとやってください。PDCA サイクルみたいなのが出てきて、現状把握、制度設計も全部大学の先生の仕事です、それが大学改革の道ですとなった。

すると大学教員は二極化していきます。一方の人々は、つい頑張っちゃうんですね。そうするとやればやるほど底なし沼で、「あの先生頑張るね」「結構ちゃんとやるね」といって、また仕事が増えていくのです。そういう先生がそれぞれの学部で何人か出てくるんです、必ず。そこにどんどん集中して、やればやるほど底なし沼ですよ。そのうちに、そうして大学のために頑張っている先生たちは、どんどん研究の時間はなくなって、研究者としてはアウト、つまりもうあまり創造的な仕事ができなくなる。すると、本人も自分の本領は大学のアドミニにあって、研究はもういいなんて思い始める。

そういうふうな先生方が頑張る一方で、もう少し労力を惜しむ先生たちも出てくる。「いや、私は組織的なことをやっても失敗するだけですから、そっとしておいてください」「研究費いりません、手当もいりません。この大学に静かに生息させてもらえればいいんです」「学生もいりません。静かにさせてください。でも、私の研究領域は大切ですから、私の研究領域だけ守らせてください」。そういうふうなふるまいをする先生がもう一方に現れてきて、負担はますます不均衡になり、大学の先生は二極分解するのです。笑ってらっしゃる先生もいると思いますけど、これは本当に生々しい話ですね。

3 番目の話に移りたいと思いますけど、今や私たちは、そもそも大学って一体何なのかわからなくなっている。原点に戻ろう。大学とはそもそもなんで、どこに向かうべきなのかを遠くまで見よう、ということを私は主張したいと思います。3 番目の「大学の死 大学の再生」、つまり大学の定義、あるいは大学の再定義という話ですね。

一言で言えば少なくとも大学はこれまでに 2 回誕生しています。1 回目の誕生は 12 ～ 13 世紀です。2 回目の誕生は 19 世紀です。逆に言えば大学は 1 回、死んでるということです。いつ大学が死んだのかというと、16 世紀から 18 世紀までです。つまり 12 ～ 13 世紀に非常に発展していった大学は、16 世紀から 18 世紀にかけて力を失います。16 ～ 18 世紀、大学は決して重要な存在ではありません。近代の著名な、誰でも知っている大思想家、大科学者を思い浮かべていただければわかるんですけど、そういう人たちの中で大学のプロフェッサーなんてごくわずかです。デカルト、パスカル、ベーコンとかいますよね。

彼らはユニヴァーシティ・プロフェッサーではない。彼らは何であったのかというと、アカデミーの会員です。王立や貴族のアカデミーの会員でパトロンがちゃんという。非常に重要な著作を執筆しています。当時、大学というのはもう時代遅れの制度とされていた。その後、19世紀に復活してきます。その復活のあと、21世紀において、どうも大学は2回目の死を迎えているかもしれない、というのが私の認識です。

世界最初の大学は1158年のボローニャ大学、2番目が1231年のパリ大学と言われています。12世紀から13世紀、ヨーロッパの商業の復活とともに大学は誕生していくわけです。イスラムに大学があったかもしれませんが。しかしながら我々が参照する基本はこういう歴史です。何が重要かということ、この大学の誕生において、この大学の基盤を成していたのが中世都市の交易ネットワークだったということです。10世紀ぐらいから復活してくるヨーロッパの商業世界において、都市と都市の間をいろいろな人々が歩いて旅していました。歩いて旅している人々の中には商人もいれば職人もいれば聖職者もいた。芸人もいたと思います。そういう人たちの中に知識人もいて、非常に高度な知識を持った著名な先生があつた都市にいるとわかると、その先生の周りに学生たちが集まってくる。学生たちも旅人です。こういう旅人である教師と学生が結んで協同組合を作っていたのがユニヴァーシティ、大学の起源です。

彼らがなぜ協同組合を作る必要があつたのかということ、領主層に対抗するためです。ある都市で先生と学生がいつも集まって教室を開いて議論をしたりしてしているとします。領主層から見たらよくわからないから、あいつらから税金を取れということになります。でも税金なんか取られたくないわけですよ。大学、ユニヴァーシティを作った教師と学生は、ローマ法王とか神聖ローマ帝国皇帝と結んで、私たちはローマ法王、神聖ローマ帝国皇帝の特許状をもらっている。だからそこらの領主層から税金を取られるような存在とは違う、特別な存在なんだということを言ってくわけです。

大学の自治、つまり学問の自由、大学の自由というのはこれが出発点です。ですから、高尚な話というよりも基本的には世俗権力の圧迫に対する対抗手段です。税金を取られたくない、あるいは領主層から干渉を受けないで自治を守るために、超越的な権威による保護が必要だった。大学だけで学問の自治が成立するはずはありません。そうではなく、ローマ法王とか神聖ローマ帝国皇帝という権力が上にあつて、それとつながることによって自治とか自由が成立していた。この構造を忘れて、大学の自治とか自由を抽象化しちゃうと、現実性が無くなります。常に権力や政治のフォーメーションと学問的な自由というのは構造的なつながりがあること、この辺を考えておく必要があります。

当時のヨーロッパの大学では、キリスト教的、つまりアウグスティヌスの垂直方向の知があり、それにもっと水平的、世俗的なアリストテレスの哲学がイスラム経由で再流入してきます。ですから、ヘブライズ的な垂直性とヘレニズム的な水平性がうまく融合して、トマス・アキナスとかいろんな人たちがスコラ哲学という当時としては最先端の知を生み出し、その流れと結んで新しい大学の知が発展していくわけです。

14世紀～16世紀、大学はどんどん発達してきます。最初はボローニャとかパドヴァとかイタリアだったのが、フランスにもイギリスにも広がって、14世紀にはオックスフォード大学、ケンブリッジ大学ができてきます。それから中欧にも広がってクラカウ大学とかプラハ大学とかウィーン大学とか、ヨーロッパじゅうに大学ができていく。全体がキリスト教的秩序の中で、知の拠点として大学は広がっていく。そこでは、全部ラテン語で教育していますし、プロフェッサーシップの共通化など、教育の共通性が出てくるわけです。要するに今、ボローニャ・プロセスでEUがやろうとしていることの原点です。

ところが、そういうふうな大学の発展が16世紀以降転換する。16世紀は世界のパラダイムが劇的に転換した時代ですから、大学は新しい世界についていけなくなってきました。16世紀のパラダイム転換の背景は二つあります。一つはグローバリゼーションです。当時は大航海時代、コロンブス、バスコ・ダ・ガマ、マゼラン、そういう人たちが世界の航路を発見して、世界が一つにつながって、世界観が変わります。もう一つは印刷革命。グーテンベルクが15世紀の半ば過ぎに活版印刷を発明します。そうすると16世紀になると活版の本がヨーロッパじゅうに出回るわけですね。今のネット、デジタル革命と同じです。情報へのアクセシビリティの在り方が16世紀前半に決定的に変わります。それまでは重要な知識にアクセスしようと思ったら、重要な知識を持っている先生のところに何ヶ月も旅していくか、あるいは修道院に所蔵されている著名な本、聖典を読むために、旅をして行き着かなくちゃならなかった。ところが活版印刷の発明で何千、何万部と本が刷られて流通するようになった。そうすると何ヶ月も旅しているなんて時間をもったいない。ちょっとお金があれば活版で印刷された本を買い集めて、自分の周りに書棚を作って、それを読んでいったほうが効率いいということになります。

コペルニクスが地動説を立てた背景にはこの問題が大きく影響しています。彼の後半生、活版が世の中に出回るようになってから、自分の身の回りに印刷された天文学書のデータを集めてくことができるようになります。このデータを比較参照していくと、どうしても地動説の公式のほうが正しいと思わざるを得ないとの結論に行き着くわけです。

データとか情報へのアクセシビリティは16世紀には決定的に変わっていきます。しかし、この時代に大学は先生の周りに大学生を集めて、ラテン語で講義をしてという昔からの方法を採用していたわけですね。時代についていけない。したがって16世紀以降、大学の力は衰えていきます。そして、新しい知のネットワークとして、出版業者が非常に力を持ってきます。ヨーロッパじゅうで大量の本が出回って、先端的なことをやるので、人は大学の先生になるよりも、出版社から本を出していった方がいいと思う。加えて、もう一つのポイントはアカデミーです。アカデミーの会員になって、王侯貴族の庇護を受けながら、自分の本を四六時中書いて研究をして、出版をしていくというのがエリート知識人の道であるというふうに変わっていくんです。これが17世紀、18世紀に起こったことです。アカデミー・フランセーズやロイヤル・アカデミーの会員になっちゃったら、大学で教えるなんて面倒くさいことをせずに、王様からお金をもらいながら研究し、出版し続ける。

そうすると、大学なんともう古臭くて、二流の教育機関というふうになるのです。

ところが 19 世紀になってフンボルトが現れ、突如大学は復活します。つまり 18 世紀を通じて落ち目だった大学が 19 世紀前半に、しかも文明の中心とされていたフランスでも産業の中心のイングランドでもなく、周縁のドイツで復活する。これが重要です。ナポレオン戦争ではドイツが負けています。ドイツが負けたことによってドイツのナショナリズムが興った。ドイツはフランスのような文明国家ではないかもしれないが、カルチャー、文化を持っている。フランスに負けただけの知的ポテンシャルを持っているというふう考えた。例えばフィヒテだったりシラーだったりゲーテだったりいろいろなドイツのロマン派の知識人がいて、その流れの中でフンボルトが新しい大学の理念を出すわけです。フンボルト型の大学、つまり教育と研究の一致。先生がより優れた知識を持って学生に伝授するというのではなく、先生と優れた学生が一緒になって学び創造する。教育と研究を一体としてやる場として大学を再定義し、これを国家が支えていったのです。文系の場合にはゼミナール、理系の場合には実験室。このフンボルト型大学のアイデア、これが大ヒットして、ドイツの大学はヨーロッパを制覇し、影響はアメリカまで及んでいきます。

スライドのこの辺は飛ばしますが、一つだけ、アメリカの場合について触れておきます。アメリカの場合、ハーバードにしてもイエールにしてもプリンストンにしても、19 世紀末まではドイツの大学にかないません。カレッジの改革をして、ドイツのようなユニヴァーシティを作ろうとしますがうまくいかなくて、みんな挫折します。なぜならばアメリカ社会はカレッジでのリベラルアーツ教育を非常に重視していたからです。一方、ドイツはどちらかというと専門の教育研究を重視していた。当初、アメリカの主要なカレッジは、リベラルアーツ教育を専門教育に転換して研究と教育を一致させようとするのですが、これはどうもうまくいかない。けれども、失敗に失敗を重ねる中で、ジョンズ・ホプキンス大学の取組がでてくる。彼らは、カレッジをユニヴァーシティにしようとするのをやめたんですね。カレッジにはカレッジの良さがあるからそれを残す。だけでもカレッジとは別にカレッジの上にグラデュエートスクールを作っちゃおうと。カレッジをユニヴァーシティにするのではなく、カレッジ+グラデュエートスクール=ユニヴァーシティという、別の公式を立てた。カレッジは専門教育をしない。リベラルアーツ教育を徹底的にする。専門教育はグラデュエートスクールです。そこで MBA とか Ph.D. をガンガン出して世界を制覇するという戦略を立て、これが大成功する。20 世紀以降、ドイツは 2 回の大戦に負けて力が衰えますから、むしろアメリカン式大学概念の時代になっていくのですね。

日本の場合、厄介なのはごった煮だということです。いいとこ取りなんです。日本の国立大学がやってきたことは、世界中見渡して、この分野はモデルとしてここがいいよね、ということそれぞれでやって、なんとなく一緒にしてきた。東京大学の例をあげると、文学部/理学部はドイツ・イギリスがモデルですけど、医学部はドイツがモデルで、法学部はフランスがモデルで、工学部はスコットランドがモデルです。農学部はアメリカがモデルで、教養学部はドイツ・アメリカがモデル、つまりバラバラなんです。統合的な理念があっ

て発達してきたというよりは、それぞれの分野を集めて、とりあえず一つにした。しかも戦前はドイツ型のモデルでやってきて、戦後はアメリカのモデルを入れますから、大学1・2年生の一般教養課程は基本的にアメリカのカレッジがモデル、3・4年生の専門課程になると、突然ドイツ型のモデルになります。そして、大学院課程になるとまたアメリカのモデル。そういうごった煮なので組織を体系化できません。ごった煮の複雑さに自分たちで方向を見失ってしまっているというのが日本の現状でございます。

さて、大変雑駁ですけど、大学の歴史の話をしてまいりました。大学の歴史を見ると、私は4段階に整理できると思います。一つは12世紀から15世紀まで。これは大学の最初の誕生、中世型の大学が発展していった時代です。この時代の大学というのは基本的には教師と学生の共同体。特権的な共同体です。その背景には中世都市を基盤にした大学の発達がありました。ところが12世紀から15世紀まで発達した大学は、16世紀以降、最初のゆるやかな死を迎えます。学問の拠点、知的生産の拠点は大学からアカデミーへ。そして出版ネットワークへと移行していきます。しかし19世紀以降、再び国民国家を基盤に大学は第2の誕生を遂げます。ここでの理念は研究と教育の一致、フンボルト型の理念でした。この時代、国民国家を基盤とした大学の爆発的増殖が世界的に起こっていった。

21世紀の半ば、何がこれから起こっていくかということ、私は大学の第2の死と再生だと思っています。全世界に1万もある大学が本当にサステナブルなのか、日本に800もある大学が本当にサステナブルなのか、疑問です。ある種の死を迎える可能性は十分にあるのです。しかし大学がそのまま無くなってしまおうとは思いません。大学がゆるやかな死を迎えつつ、再生を迎えていくのではないか。その場合の再生、つまり大学の再定義というのはいかにして可能なのか。それがこれからのお話になりますけど、グローバルな知識基盤と社会的実践をつなぐ大学というのがこれからのテーマになると思います。

4つほど基本的な軸があります。一つは「複数専門分野の複合化」です。それから「国境を越えたネットワーク的協働」、いわゆるグローバル化ですね。それから「デジタル知識基盤・アーカイブの充実」です。そして4つ目が重要で、「研究教育と社会的実践の融合」です。19世紀のフンボルトが考えた研究と教育の道は二つです。未来の大学がやるとすると二つじゃなくて三つだと思います。研究と教育と社会的実践です。この三つを融合させることに大学の未来があると私は思います。

さて、そのために文系が役に立つというお話にいきたいと思います。2年半前の問題に戻りますけど、文系は役に立たないと言われ、文系学部廃止ということで議論になったときに、人文社会系の先生方からいろいろ反対意見が出ました。この反対意見には2種類あったと思います。ある雑誌に寺脇研さんと広田照幸さんの議論がでました。寺脇さんのほうは「私が大学で教えている漫画論とか映画論なんて、何の役にも立っていません」と。それに対して広田さんが、「人文・社会系に『経済効果』を求めるのはおかしいが、短期的には別として、長期的には、そうした『効果』はちゃんとあるんだ」というふうに反論しています。寺脇さんには申し訳ないが、私は広田さんのほうの立場です。人文・社会系が大

切だ、というときの論理として、「人文社会系は役に立たないけども、役に立たないものも大切なんだ」という議論と、「そうじゃない。人文社会系は長期的に役に立つんだ」という議論の二つがある。私は後者であるべきだと思います。そのためには役に立つとはどういうことか、ということの再定義が必要です。

「役に立つ」ということには2種類あると考えています。これはマックス・ウェーバーに従っているのですが、目的に対する手段として役に立つ、これを目的遂行的、あるいは手段的有用性と呼んでおきましょう。この目的遂行的ないし手段的有用性に対して、目的や価値を創出する、目的や価値を生み出すことで役に立つ、価値創造的な有用性というものがあるのです。例えば東京から香川に来るのに、どうやって来るのが一番早いかわけです。これは飛行機という手段によってより目的が有用に遂行されるわけです。こういうふうな知識は必要です。必要ですけどその弱点は、手段的な有用性は与えられた目的に対してしか役に立つことができないということです。目的についての価値尺度、その価値尺度そのものが変わってしまうと、途端に役に立たなくなるのです。

一つの例を出しましょう。60年前、1960年代の東京オリンピックのときに人々は何を求めていたかということ、「より速く、より高く、より強く」です。つまり、より速く、より高く、より強く、より大量に生産し、効率的に生産する。それが発展の道だとみんなが信じていました。また、実際にそうだったと思います。でも2010年代の今、より速く、より高く、より強く、より大量に生産することが本当に私たちの価値でしょうか。私はそうは思いません。今の時代の価値というのは、例えば、より楽しくとか、より末永くとか、よりしなやかにとか、よりサステイナブルとか、別の価値に転換しているんです。

つまり、3年や5年じゃ変わらないけど、30年50年という単位で考えたときには、社会の基軸になるような価値が変わってきているのですね。この価値の転換に対応するためには、単に目的遂行的、手段的有用性の知だけではだめで、価値創造的な知が必要です。価値を作り出していくことが必要なのです。そのためには、みんなが当たり前だと思っているけど、これ、違うんじゃない？ たった一人でもそう本気で思えることが必要。

でも、たった一人でそう思えるためには、他のみんなが信じていることがそれが当たり前じゃないってことを想像できる知識がないといけません。つまり過去の長い歴史の中で、その価値が転換してきたということを知識として認識していなくちゃいけない。あるいは日本とイスラム圏とか、インドとかアフリカとか、違う文化圏、社会圏で、価値の基軸が違うことを認識していないといけません。人類学的ないし歴史学的な広がりを持って、その価値の多様性を認識できていなくちゃいけない。これは文系の知なのです。ですから、理工系はどちらかというと短く役に立つけれども、文系は長い時間的展望のなかで役に立つ。こういうふうな考えてみるができるんじゃないかと思います。

今、私がお話しているのは、文系の話で、教養の話ではありません。教養概念というのは近代国民国家ができる過程で人文学と結びつきながら、Kultur、あるいはBildungとい

う概念と結びついて発展してきたものです。教養とリベラルアーツも実は違う。リベラルアーツと文系も違うのです。文系と教養とリベラルアーツ、それから一般教育、共通教育、全部違います。この細かい違いが、日本ではごちゃごちゃのまま議論されるから話が混乱する一方なんですね。リベラルアーツは、古代ないし中世起源で、文法学、修辞学、論理学、代数学、幾何学、天文学、音楽学の7つからなっています。文法学と修辞学と論理学はどちらかというとな系に近い。でも代数学と幾何学、天文学は明らかに理系です。音楽はどちらかというとな系と一般に考えられますが、実は理系なんですね。音楽は中世的世界では数学の問題でした。したがって4つの理系と3つの文系からなるのが1つのリベラルアーツ。つまり、この時代には理系と文系なんていう区別はないんですね。このリベラルアーツの概念が16～17世紀になると、フィロソフィーの概念に転換していきます。ですから、フィロソフィーには数学や天文学が含まれています。デカルトは哲学者ですけど、数学者でもあった。ライブニッツだってそうです。つまりデカルト、ライブニッツの中で、数学と哲学の区別、文系と理系の区別はありません。

問題は理系と文系の区別が一体いつからできてきたのか、ということです。理系文系の軸と、役に立つ役に立たない、あるいは目的遂行的、価値創造的の軸は別です。必ずしも文系が目的遂行的に役に立たないわけではない。ちょっと考えてみればすぐわかることですけど、中世社会において一番役に立つと考えられてきた学問は何だったかというとな系、神学です。なぜなら神様のために役に立つからです。中世の学問の中で役に立つと思われていた学問は三つあって、神学と法学と医学です。医学は人のために役に立つ。法学は国のために役に立つ。でも神学は神のために役に立つんですから、一番直接的に役に立っていました。しかし近代になると、神学が退場する。その代わりに、市場のために役に立つ経済学、産業のために役に立つ工学ができ、最近では情報科学とか環境科学とか、生命科学とかが出てきています。

そして、問題になっている文系と理系の区別ですけど、その区別がはっきり出てくるのが18世紀末以降です。これは言うまでもなく、産業革命が原因です。18世紀末以降の産業革命の中で社会が劇的に変わっていった。この産業革命を支える知は基本的には理系の物理学や工学や理系の知だったんです。ですから、理系、自然科学系が18世紀、19世紀を通じて、それまで以上に拡大するわけです。そうした19世紀末における理系、自然科学系の拡大の中、一体人文社会科学にどういう役割があるのかということは、当時の人文社会科学者は真剣に考えていました。この問題を最も真剣に考えたのが、いわゆる新カント派と言われる人々です。ヴィンデルバントとかリッカートとかそういう人たちがいたわけですが、なんとといっても代表選手はマックス・ウェーバーですね。彼らの結論は何だったのかというとな系、人文社会科学というのは価値の科学だと。理系は法則定立的な学問で、価値が決まったシステムの中で、目的に対して実現していく手段についての知。でも文系は価値を問う。価値を問題にして、意味とか価値を考えていくのが人文科学のテーマだということ、既に19世紀末に新カント派の人たちは言っていたわけです。

マックス・ウェーバーは、この価値科学が社会科学としていかに成立するかということ、有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で考えていました。この本は何を言っているかということ、カルバニスト、つまりカルバン派の人たちは、16世紀、神のために尽くすという価値を求めて禁欲とかいろいろな宗教的実践をしていた。それが、資本主義のシステムが展開していくと、この価値の部分が抜け落ちちゃって、手段的有用性の中に人々は絡め取られていった。これが現代社会だとして、資本主義社会を批判したわけです。価値から手段への転換が資本主義という巨大なシステムにおいて起こったのです。そして、この流れのなかで、理系が重視され、文系は周縁化されている。今日の文系学部問題は、まさにウェーバーが認識していたように、資本主義発展の結果です。

ですから、人文社会科学がなぜ必要なのか、なぜ有用なのかということは、みんなの気持ちを豊かにするとか、そういうことじゃないのです。人々の情緒を養うとか、人々の教養を養うから人文社会科学は必要なのだとそういう議論はやめてほしい。それは人文社会科学を守る論理としては全く不十分です。そうではなく、人文社会科学は自然科学とは違う仕方でも有用なんだと。資本主義のシステムに私たちのすべてが絡み取られてしまっていて、後に何も残らなかったなんてことにならないためには、文系の知こそが役に立つんだということです。なぜならば、有用性ということを考えるには異なる歴史的な尺度が必要です。目的遂行的な有用性も短期的には必要ですが、それでは既存の価値システムの歯車になるだけです。むしろ、価値創造的な有用性が長期的には必要です。3年－15年じゃなくて、15年－50年、あるいは50年－500年という長いスパンで考え、価値の展開に対応していく知を持っていないと社会は長期的にサステナブルにならない。そのためには、自然科学と人文社会科学の融合がなければならない、ということです。

では、それをどういうふうにして現代の大学の中に実現していくかというのが最後のテーマです。これを実現していくためには現代の日本の大学には壁が多すぎます。どういう壁かというと、入試の壁、就活の壁、学年の壁、学部の壁、言語の壁です。この壁を突破する仕組みを作らない限り、文系と理系の協働は成立しないのです。

そのために何が重要かということ、甲殻類化した大学が脊索動物へと進化することです。今の大学は、甲殻類化しています。甲殻類は、カニとかエビとかお酒と一緒に食べるには美味しいですが、大学が甲殻類じゃ困ります。ボーダーレス化している社会において生き延びていくためには背骨を通さなくちゃいけないし、脊椎を通さなきゃいけない。ホヤとか、ナメクジウオとか、脊索動物というのがあるらしい。これは人類の祖先とのことです。脊索っていう脊髄が通っているんですね。ここから出発して、骨を通すんです。

大学に通す骨には、横骨と縦骨があります。横骨は学際横断と国際連携。つまり、学部や学科や専門の研究や専攻を超えた教育の仕組みをいかに作っていくか、国際的な標準化に合わせて国の壁も超えていくような仕組みを、大学の中にいかに実現していくかということです。そして、縦骨は、高大連携と社会連携です。高校と大学の入試の壁にいかに穴を開けるか。それから就活の壁、キャリアパスをいかに再設計するか。縦の軸と横の軸に

骨を通すことが必要です。そのために二つのことを申し上げたいと思います。一つは宮本武蔵の二刀流。それからもう一つは、人生で3回大学に入る社会を実現することです。

まず宮本武蔵についてです。現代社会は、非常に複雑化した高度な技術的知識基盤社会です。しかもその社会は流動的です。そうした社会においては、一つのことだけを深く学ぶというよりも、深く広く学ぶ必要があります。でも時間は限られています。そこで、宮本武蔵の二刀流です。一つの専門ではなく、二つの専門をうまく組み合わせて学ぶ仕組みを大学の中にどう導入するかということです。日本の大学の中で最も先端的に実施されているのが、ICU、国際基督教大学です。アメリカの大学では当たり前のことですが、ひとりの学生が大学に入った時点で二つ専攻を持ちます。宮本武蔵がなぜ佐々木小次郎に勝ったのか。二つの刀を持っていたからです。長い刀でなくてもいい、短くても二つ必要だった。今の社会にはこの考えが有用だと思います。例えばコンピュータサイエンスの学生が法学部で知的財産権について学ぶとか、環境科学を勉強している学生が中国の歴史について学ぶとか、医学部の学生が文学部で哲学について学ぶとか。これ必要だし、いい組み合わせです。こうしたいい組み合わせがたくさんあるはずです。

複雑で流動的な社会の中では、複数の専攻をうまく組み合わせるデザインが必要で、そのやり方がある。そうすると、その先に何があるかということ、大学の再定義です。先程申し上げましたように、近代の大学は国民国家の大学でした。国民国家の大学においては目的遂行的な有用性と価値創造的な有用性がそれなりに予定調和的に結び合わさっていました。目的遂行的な有用性の知というのは言うまでもなく、医学、工学、経営学、農学です。それに対して、価値創造的な有用性というのは、哲学、数学、美学、人文学、地学です。これがフンボルト理念のもとに結びついていたのが近代の大学モデルです。

しかし現在、国民国家の基盤が非常に弱まっています。グローバリゼーションが到来し、地球社会でものを考えるようになった。国民国家の大学をどのように地球社会の大学に転換できるかということが課題です。この地球社会の大学は、目的遂行的な有用性において、知的基盤でなくてはなりません。新しい知として出てきているのは環境科学とかデータサイエンスとかリスクサイエンスとかそういう課題発見的な実践知です。でも、それだけじゃだめなのです。むしろそのときに、新しい地球社会の哲学が必要とされます。新しい地球社会の哲学とは何かということ、グローバルな知的遺産を私たちの未来社会がどういうふう引き継ぐかということ。つまり、一方ではグローバルな知的遺産を引き継ぎ、片方ではグローバルな未来創造に向けていく、この媒介役を新しい地球社会が担うべきであり、そのためには課題解決的な知と、グローバルな教養知をつなぐ仕組みをどのように構築していくかということが問われています。

そして、それを実現していくためには、大学が、入試と就活の間の通過儀礼的な組織から脱皮することが必要です。今、高校生は入試の壁は一生懸命飛び越えようとする。でも、入試の壁を飛び越えたあと、どういう世界が待ってるかなんてほとんどわからない。そして、大学に入ると一年生の間は入試が終わって遊びます。これが二年生になると、今度は、

就活の壁をどうやって乗り越えるかということに一生懸命になり始めます。そのときも、就活後の世界はわかっていない。大学は、入試と就活に挟まれた中間地帯になってしまっている。これじゃだめですね。全然、もうだめです。壁に穴をどうやって開けるか。入試の壁の手前では壁の向こうが見えないような形をどうやって変えるか。就活の壁の手前では壁の向こうが見えないような状態をどうやって変えるかということです。

いくつか方法はあります。特に重要だと思うのは、人生で3回大学に入ることです。大学を18歳の子たちばかりが集まる組織から、18歳の子もいれば30歳代前半、60歳前後の人も当たり前のようにいる組織にする。人生のキャリアチェンジのための転轍手としての役割を果たすような場にする必要がある。なんで30代前半かというと、だいたい22～23歳で就職すると10年後が30歳代前半です。10年は苦しくても職場を辞めるな。10年まともにやらないとプロにはなれない。でも10年やればその職場、職種で人生を歩むのか。いや、もうちょっと違う道があると思うかもしれない。30歳代前半、子どももせいぜい幼稚園ぐらい。そのくらいの時点がキャリアチェンジできる最後のチャンスです。そこでキャリアを転換する媒介に大学がなり得るかということがポイントです。

そしてもう一つは60歳前後です。定年間際。だいたい子どもも大学卒業して子育ては終わった。そのときに、自分の未来を考えると、70歳代後半まで元気で、まだ15年から20年、フルで頑張れる自分の人生がある。それを余生とするか、それとも全力疾走してもう一回、花を咲かせるか。この分かれ目が60歳前後です。そうすると、60歳前後でゆったりしたい人はゆったりしてもらえばいいんだけど、必死に頑張るといった人たちがもう1回大学にチャレンジする道を開かなければいけません。

そうすると入学の母集団は、3倍には増えないと思いますが、少なくとも1.5倍、1.6倍には増えると思います。母集団を増やさないと大学は質の劣化は免れません。もうすでにだいぶ劣化していますから、これ以上の劣化は大学の死を意味します。それなりにサスティナブルに未来の大学のクオリティを維持していこうとすると、母集団を変えるしかなく、それには世代的な多様性を拡大することが必要になる。

これは今の若者たちにとってもいいことだと思います。今は若者ばかりだからその意識で画一化されていますけど、そうじゃなくて、同じ教室や同じゼミの中に3分の1ぐらい60代の人もいれば、30代のバリバリで社会人やっている人もいます。そういう中で社会とは何か、それから人生とは何かということを議論して、60代の人もそこで挫折を経験することができるような組織に、大学がどう変化させられるかということです。

最後に、大学の未来として、3つのビジョンを示しました。一つ目は甲殻類から脊椎動物への進化。背骨の通ったボーダーレスな学び。二つ目は宮本武蔵の教え、二刀流ということです。複雑化し、流動的な知識社会を生き抜くためには多元的な普遍性が必要であるということです。そして三つ目は大学を人生の通過儀礼からキャリア／ビジョンの転轍機に変えなくちゃいけないということ。そのためには、科目の数を減らして科目に対するリソースの投入をもっと増やす。つまりTAとかちゃんとつけて、成績をもっと厳しくつけ

るということです。学年制から単位制へと移行することで、人生で3回大学に入ってもいいなど、30歳代の人にも60歳前後の人にも思ってもらえるような機関に大学を変えていく。その先にはグローバルな課題を解決するような、グローバルな地球社会の大学という形が見えてくるのではないかと思います。以上で終わらせていただきます。